



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活第4主日 C年 (2022年5月8日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 13章 14、43—52節

第二朗読：ヨハネの黙示録 7章 9、14b—17節

福音朗読：ヨハネによる福音書 10章 27—30節

永遠の命

第一朗読では48節以下に登場する「主の言葉」にこそを留めてください。「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。……こうして、主の言葉はその地方全体に広まった」(使13章48—49節)。パウロたちが伝えた「主の言葉」とは、文字通りイエスさまが語られた言葉を伝えただけではありません。むしろ、イエスさまの受難、死、復活の出来事を伝えたのです。つまり、イエスさまによってなされた救いの出来事を「主の言葉」として伝えたのです。

46節にある「永遠の命」という表現もここに刻んでほしいです。「主の言葉」は「永遠の命」と関係します。ユダヤ人たちはパウロの説く「主の言葉」を拒否し、「永遠の命」に値しないものとなってしまいました。反対に異邦人たちは「主の言葉」を受け入れて「永遠の命」へと向けられて歩み始めます。この歩みを信仰と呼んでいいでしょう。「主の言葉」を聞く、耳を傾けるのが信仰には必要なのです。

第二朗読にある「大きな苦難を通して来た者」(黙7章14b節)はここにしみる表現です。なぜなら、これは神さまの救いを信じて、苦しい今を生きぬくキリスト者たちそのものを指すからです。つまり、わたしたちを指している表現です。「幕屋を張る」(15節)は、苦しみの中でキリストの死に結ばれたキリスト者たちの群れの中に神さまは幕屋を張り、そこにご自分の居場所を定め、いつもおられるのです。17節の「神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである」は希望にあふれる表現ではないでしょうか。キリスト者たちが直面する苦しみ、その苦しみからの解放は神さまの力、恵みによるのです。もはや自分たちの力では苦しみから解放されないということをよく知っているのがキリスト者であるわたしたちの生きる姿勢なのです。

福音朗読でイエスさまは、「わたしは彼らに永遠の命を^{あた}与える」(28節)とおっしゃいます。そして、第一朗読でも「永遠の命」は登場^{とうじょう}します。「自分自身を永遠の命に^{あた}値しない者^{あたい}にしている」(使13章46節)。

「永遠の命」とはいったい何でしょうか。父なる神さまとの^{ふか}深く、豊かな^{かか}関わりあいが「永遠の命」です。ですから、すべての^{ひぞうぶつ}被造物は神さまとの^{まじ}交わりの中で生かされていくとき、「永遠の命」を生きるのです。ペトロたちは、すべての人が「永遠の命」に^{まね}招かれていると考えていました。ただし、条件は「主の言葉」に^{かたむ}耳を傾けることです。イエスさまもちろん「永遠の命を与える」とおっしゃって、わたしたちを^{まね}招きます。なぜなら、イエスさまご自身が「命の水の^{いずみ}泉^{みちび}へ^{みちび}導く」(黙7章17節) ^{ぼくしや}牧者だからです。なぜ、イエスさまはこれほどまでにわたしたちに「永遠の命」を与えようとなさるのででしょうか。福音朗読の最後の言葉がヒントを与えてくれます。「わたしと父とは一つである」(ヨハ10章30節)。父なる神さまとイエスさまは一つに^{むす}結ばれています。その^{みっせつ}密接な^{ひつじ}つながりを、羊であるわたしたちにもイエスさまは体験してほしいと願っています。しかし、わたしたちが直接、父なる神さまと一つになることはありません。わたしたちがイエスさまとの密接な^{みっせつ}つながりにあれば、イエスさまは父なる神さまと一つなのですから、わたしたちは父なる神さまとイエスさまを^{とお}通して一つに^{とお}させていただけるのです。こうして、イエスさまが永遠の命を^{とお}生きたように、わたしたちもイエスさまのおかげで父なる神さまから永遠の命を^{いっしょ}いただき、父なる神さまと一緒に生きていけるようになるのです。

合同堅信式のお知らせ

日時 :5月22日 日曜日 雨天決行

午前11時より

グランドのルルド前にて

(8時半と9時半のミサはありません。ご注意ください。)

ミサ後 お弁当の販売があります。

グランドのあちらこちらでピクニック気分^{ピクニック}で召し上がってください。

自家製のお弁当も持ち込み可です。

みんなで楽しみましょう。